



私こと「明神姫子」は、日本古来より存在している、とある組織に生まれ育った。

その組織とは、闇にはびこる魔物を人知れず退治し、世の平穏を守る者達「退魔士」だ。その為に、私は幼い頃から厳しい修行を積み、厳格なしきたりを守って育ってきた。

退魔士となる人間は、生まれながらにそれぞれが独自の特殊能力を持っている。

私の普段の能力は、並の人間より少し強い程度であり、魔物と戦えるほどの強さは無い。しかし「性的興奮や快楽」を得る事で、退魔に必要な力を得るといふ特殊能力を持っている。しかも、その手段が変態的であればあるほど、強い力を得る事が出来るのだ。

私に与えられた任務は、とある高校に入学し、その街に現れる魔物を狩る事だ。

私はこれから起こる事を想像し、緊張と不安、そして興奮を感じながら、その町に移住した。



今日から指定された高校に通いながら、この街での任務をこなす事になる。
去年まで男子校だったが、今年から共学になった高校のようで、女子生徒は全く居ない。
そんな高校なので、都合がいい事に校則で女子に関する事がほとんど無い。
制服は「高校生の制服にふさわしい物」という一文だけで、スカートの長さに関する記述も無い。
私はオーツドックスなセーラー服に身を包みつつ、スカートの丈を限界まで短くした。



また、下着に関する規則も無いため、どんな下着でも罰せられないらしい。
つまりそれは、下着を着けていなくてもいい、という事だ。
私はセーラー服のスカートを限界まで短くした上で、下着を脱いで学校へと登校した。





【男子】「おい、学校の前にすげえ可愛い子がいるぞ」

【男子】「そういえば、年のクラスに転入生が来ると言ってたが、もしかしてあの子なのかな？」

【男子】「この学校に女子が入るとは思わなかった。それにしてもスカート短いな」

【男子】「あっ！ 風でスカートが！ み、見え…ない？」

男子達が私を見て回々に噂をする。私のスカートから覗く太ももに注目しているのが分かる。まだ私がノーパンだとバレて無いようだけど、この調子だと時間の問題かもしれない。男子達の視線や噂話にドキドキしつつ、私は自分のクラスへと向かった。



【姫子】「今日からこのクラスに転校してきました、明神姫子です。よろしくお願いします」

私が教壇の脇に立って挨拶すると、クラスの男子達から矢継ぎ早に質問が飛び出す。趣味や特技、前の学校の話に始まり、質問はだんだん卑猥な方向へと発展していく。

【男子】「身長と3サイズを教えてください!」

【姫子】「身長は156。3サイズは上から、92、54、87」

【男子】「なんでそんなにスカート短いですか!」

【姫子】「その方が動きやすいでしょ?」

【男子】「今日の下着は何色ですか!」

【姫子】「下着は着けない主義なので色はありません」

【男子】「えっ…じゃ、じゃあそんな短いスカートでノーパンって事…?」

このあたりで私の自己紹介と質問は先生に止められてお開きになってしまった。





そして放課後……1日中、男子達にじっくりと視姦され、程よく興奮状態になった私は、帰宅するその足で、魔物が住処にしていそうな廃墟へと向かう。そこには、低級魔族に憑依され、全身の筋肉や皮膚が強化された浮浪者が待ち構えていた。

【浮浪者】「ゲゲツ……女の退魔士だ……」
【浮浪者】「大して強くないぞ……この人数なら勝てそうだな……」
【浮浪者】「ボコボコにして犯してやる……俺らの種で孕ませてやる……」

魔族に取り付かれた浮浪者が好き勝手な事を回走り、じりじりと私と取り囲んでいく。戦いに備え、私は魔族のみを切る事が出来る特殊な武器【退魔刃】を具現化する。退魔刃は私が得た興奮や快楽に依りて、強さや持続時間が大きく変化する武器だ。それゆえに、無駄に振るう事は出来ない。私は手に汗を握りながら、抜刃の瞬間を見計らう。その次の瞬間、浮浪者達はその鋭い爪を私に向け、一斉に襲い掛かってきた。





【姫子】「はあっ……はあっ……くっ……」

低級魔族とは言え、流石に1日の視姦程度で得られる力では、思うように戦いを進める事が出来なかった。スカートを剥ぎ取られ、上着を引き裂かれながらも、なんとか半分以上の浮浪者を倒したが、そこで私の力が尽き、退魔刀が消えてしまった。

【浮浪者】「お、どうした？ もう終わりか？」

【浮浪者】「仲間が随分やられちゃったなあ」

【浮浪者】「きっちりお礼してやるから覚悟しな」

低級魔族に憑依された浮浪者達は、ニヤニヤしながら私に歩み寄った。



